

令和 5 年 5 月 27 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2022

課題番号：20K00680

研究課題名（和文）構文学習における構文の限定的生産性の探索的研究

研究課題名（英文）Exploring Partial Productivity of Constructions in Conversation

研究代表者

木原 恵美子（Kihara, Emiko）

神戸大学・大学教育推進機構・准教授

研究者番号：30611371

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000円

研究成果の概要（和文）：まず、会話における幼児や学習者の構文選択は、エラー予測、カバレッジの調整、構文へのアクセス、会話への参加目的といった構文の知識以外の要因の影響を強く受けることが明らかになった。これに対して、大人の母語話者は構文の知識とこれまでの経験に基づいた構文選択を行っており、それ以外の要因の影響を幼児や学習者ほど受けにくい可能性があることが示唆された。次に、この結果より、幼児、学習者、大人も構文の選択と産出時にはグッドイナフアプローチ（Goldberg and Ferreira 2022）をとることがあることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本プロジェクトの結果を受けて、最終年度にAdele Goldberg氏を招聘し、国際シンポジウムを開催した。その結果、幼児、大人、学習者も構文の選択と産出時にはグッドイナフアプローチ（Goldberg and Ferreira 2022）をとることがあることが明らかになった。今後は、話者（幼児、学習者、大人）がどのような場面でグッドイナフアプローチをとる傾向があるのかを分析していく必要があることが確認された。

研究成果の概要（英文）：We found out that 1) when L2 learners (children and students) select constructions during conversation, they are subject to many factors (beside the knowledge of constructions) such as error prediction, adjustment of coverage, accessibility to constructions, and purpose of conversation. Additionally, it is found out that 2) adults tend to select constructions based on their past experience, that is, familiarity to constructions. These results suggest that children and learners do not have enough experience, compared with adults, so that they are influenced by their ability, skills, and circumstances.

研究分野：認知言語学

キーワード：幼児 学習者 構文学習 会話における構文 グッドイナフアプローチ

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

これまでの日本の構文研究では大人の母語話者の文法システムに基づいて作られた表現を BNC コーパスや COCA コーパスに代表されるような大規模コーパスを利用しながら語・句・節レベルごとに統語的・意味的・語用論的特徴を分析記述することが多く、その結果、コーパスでの使用頻度が高い構文から記述が進んだ。コーパスに基づいて構文が記述されるようになったことで、実際に使用された事例を分析する用法基盤主義が構文研究の主流となった。さらにここ数年では少しずつではあるが学習者や幼児が発話した構文の分析も増えてきたが、いずれもまだケーススタディでとどまっている研究が多く、構文の学習に関する理論的研究はいまだ多くはない。しかしながら、学習者、幼児、大人の母語話者の構文学習のいずれにおいても構文の限定的生産性 (partial productivity, Goldberg 2019) がみとめられることから、本研究では学習者、幼児、大人の母語話者の構文の限定的生産性のケーススタディの比較を行い、「第二言語習得中の学習者の構文の限定的生産性は、第一言語獲得中の幼児や第一言語獲得済の大人の母語話者のそれとどのように異なるのか」を探索的に研究する。

2. 研究の目的

本研究では、構文は学習者や幼児にどのように学ばれるのかという構文の学習面に着目し、用法基盤主義の立場からそれぞれの発話を分析することで、構文の学習と構文の限定的生産性について探索することを目的とする。2人以上による会話を分析するとわかることであるが、「構文を知っていること(言語知識)」と「構文を使えること(言語運用)」の間には特に学習者や幼児の中では大きな隔たりがある。しかし本研究では談話における構文を用法基盤主義の立場から分析することで、「実践(言語運用)における構文」という構文の動的な側面を提示することを目指している。従来の母語話者による構文研究では「構文に関する母語話者の言語知識」が分析されてきたが、本研究では「実践における未熟な学習者や幼児の構文の運用」を分析する。

3. 研究の方法

学習者、幼児、大人の母語話者の構文学習の比較を行うにあたり、本研究では研究代表者以外に、研究分担者(濱野 寛子 講師 名古屋学院大学 経済学部)に大人の構文選択の分析を、研究協力者(巽 智子 講師 神戸大学 国際文化学研究所)に幼児の第一言語獲得の分析について協力を仰いだ。研究代表者は学習者の談話データ(英語)、研究分担者は大人の母語話者のデータ(日本語)、研究協力者は幼児の対話データ(日本語)を収集し、学習者、幼児、大人の構文学習の間にどのような共通点があるのかを探った。

まず研究分担者は、大人の母語話者の SNS への馴染み度が、SNS 関連の名詞を数えるときに使用する助数詞の選択にどのような影響を与えるのかについて分析した。話者にとって馴染みのない名詞を数える際の助数詞の選択に注目し、SNS 関連で「件」が用いられる名詞(「コメント」「ツイート」等)を実験協力者(日本語母語話者の大学生、大学院生、社会人)に呈示し、SNS への馴染み度によって、SNS 関連名詞につける助数詞の選択にどのような違いがみられるのかを調査した。

次に、研究協力者は、日本語話者の子供(2-6 歳児)が応答の「うん」を会話のなかでどのように獲得するのかについて分析した。会話のやりとりと結びついている言語形式の使用および習得プロセスを探るため、日本語のディスコースマーカ「うん」に着目した。まず、子供が「う

ん」を習得するには、この形式がどのような会話の流れのなかで使われるのかを学習する必要がある。このプロセスを探るため、CHILDES データベースに収録されている子供と親の会話データを用いて量的分析を行った。

最後に、研究代表者が、L2 英語学習者の 3 人会話における繰り返しに着目し、繰り返しが会話の中でどのような役割を果たしているのかを分析した。響鳴には「いくつもある言語的要素の中で聞き手に知覚される言語的要因」が反映されるため、学習者が作り出す響鳴にみられる構文学習の認知的側面を示すことを目指した。分析には研究代表者が 2016 年より毎年収集している談話データ（日本人大学生と留学生による英語ディスカッションデータ現在 30 時間録音済、今後も毎年 20-30 時間収集予定）を用いた。会話データは日本人大学生 1 名（CEFR A2）と台湾人大学生 2 名（CEFR A2 と B2+）の英語による オンライン会話（3 時間 28 分）であった。

4 . 研究成果

まず、研究分担者の調査により、大人の日本語母語話者の助数詞の選択については、特定の活動の経験量はその活動に関連する名詞につける助数詞の選択に影響を与えうることが示された。この分析結果は、馴染み度 (familiarity) が構文の生産性に影響を与えうるという Goldberg (2019) を支持するものとなった。

次に、研究協力者は、保護者の「うん」に続く同調的な使用はあるものの初期に過剰に観察されるわけではないこと、子供の月齢に伴って yes-no 疑問文と WH 疑問文に対する「うん」返答の確率的区別が明確になる、つまり子供は適切な「うん」の共同的産出のやりとりのパターンを徐々に身につけていること、このパターンの学習において、後続するやりとりのタイプが手がかりになり得ること、が明らかになった。この研究結果は、子供が特定の共同的やりとりの中で「うん」がよく用いられることを認識し、先行発話のタイプを確率的な条件付けとして学習すること、つまり先行発話のタイプに関するカバレッジを調整するプロセスが起こっていることを示唆していると考えられる。また、返答として不適切な言語産出をした際、後続する（特に予想外であったり、否定的な）会話のやりとりが予測エラーを用いた学習につながることも考えられる。このような前後の会話のやりとりのパターンの学習のメカニズムには未知の部分が多いものの、統計的先制、予測エラーによるカバレッジの調整など、Goldberg (2019) で論じられる構文の学習メカニズムを適用して考えることが有意義であることが明らかになった。

研究代表者の分析の結果、繰り返しの頻度・繰り返される形式の長さ（語数）・複雑性（語彙レベル）は、会話の参加者の L2 能力、会話の内容、会話への参加態度 (engagement, Goodwin 1981) によって異なることが明らかになった。この分析により、L2 英語学習者の多人数会話における繰り返しの生産性には、L2 能力（構文へのアクセシビリティ）と会話への参加目的が関連することが示唆された。

以上の分析により、会話における幼児や学習者の構文選択は、エラー予測、カバレッジの調整、構文へのアクセス、会話への参加目的といった構文の知識以外の要因の影響を強く受けることが明らかになった。これに対して、大人の母語話者は構文の知識とこれまでの経験に基づいた構文選択を行っており、それ以外の要因の影響を幼児や学習者ほど受けにくい可能性があることが示唆された。

この結果を受けて、本プロジェクトでは Adele Goldberg 氏を招聘し、国際シンポジウムを開催した。その結果、幼児、大人、学習者も構文の選択と産出時にはグッドイナフアプローチ (Goldberg and Ferreira 2022) をとることがあることが明らかになった。今後は、話者（幼児、

学習者、大人)がどのような場面でグッドイナフアプローチをとる傾向があるのかを分析していく必要があることが明らかになった。

<引用文献>

- Du Bois, John. (2014) "Towards a Dialogic Syntax." *Cognitive Linguistics* 25(3): 359-410.
- Galaczi, Evelina. (2004) *Peer-peer Interaction in a Paired Speaking Test: The Case of the First Certificate in English*. Unpublished Ph.D. thesis, Columbia University.
- Goldberg, Adele. (2019) *Explain Me This: Creativity, Competition, and the Partial Productivity of Constructions*. Princeton, NJ: Princeton University Press. (木原恵美子・巽智子・濱野寛子訳(2021)『言えそうなのに言わないのはなぜか-構文の制約と創造性』ひつじ書房)
- Goldberg, Adele and Fernanda Ferreira. (2022) "Good-Enough Language Production." *Trends in Cognitive Science* 26 (4): 300--311.
- Goodwin, Charles. (1981) *Conversational Organization: Interaction between Speakers and Hearers*. New York: Academic Press.
- Hernandez, Alexia, Sammy Floyd, and Adele Goldberg. (2019) "Productivity Depends on Communicative Intention and Accessibility, Not Thresholds." *Proceeding of Cognitive Science*. pp. 428-43p

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 木原恵美子・巽智子・濱野寛子	4. 巻 22
2. 論文標題 構文の学習と部分的生産性の条件付け要因の探索的研究	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本認知言語学会第22回全国大会 Conference Handbook	6. 最初と最後の頁 18-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木原恵美子・巽智子・濱野寛子	4. 巻 22
2. 論文標題 構文の学習と部分的生産性の条件付け要因の探索的研究	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本認知言語学会論文集	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 木原恵美子
2. 発表標題 L2英語学習者による3人会話にみられる繰り返し
3. 学会等名 第22回日本認知言語学会全国大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 巽智子
2. 発表標題 会話の流れを学習する一子供の「うん」の使用の発達的变化ー
3. 学会等名 第22回日本認知言語学会全国大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 濱野寛子
2. 発表標題 助数詞の選択における話者地震の活動経験の関与について－SNS関連の数え方に注目して
3. 学会等名 第22回日本認知言語学会全国大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 巽智子
2. 発表標題 第一言語取得研究の紹介
3. 学会等名 神戸大学国際文化学研究科研究推進センター(Promis) セミナー
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 濱田真由
2. 発表標題 外国語学習者の言語処理プロセス：言語産出における文法の役割
3. 学会等名 神戸大学国際文化学研究科研究推進センター(Promis) セミナー
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 濱野寛子
2. 発表標題 話者の活動経験が事物の数え方に影響を与える可能性
3. 学会等名 国際シンポジウム「言えそうなのに言わないのはなぜか－学習者と母語話者の違い－」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 木原恵美子
2. 発表標題 L2英語学習者による響鳴ー構文のファンネル構造ー
3. 学会等名 国際シンポジウム「言えそうなのに言わないのはなぜかー学習者と母語話者の違いー」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 巽智子
2. 発表標題 質問と返答のやりとりの学習と発達的变化ー日本語親子会話コーパスの分析からー
3. 学会等名 国際シンポジウム「言えそうなのに言わないのはなぜかー学習者と母語話者の違いー」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Adele Goldberg
2. 発表標題 Choosing good-enough constructions
3. 学会等名 国際シンポジウム「言えそうなのに言わないのはなぜかー学習者と母語話者の違いー」
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 木原恵美子・巽智子・濱野寛子	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 288
3. 書名 言えそうなのに言わないのはなぜかー構文の制約と創造性	

1. 著者名 木原恵美子	4. 発行年 2023年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 25
3. 書名 認知言語学論考17	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	濱野 寛子 (Hamano Hiroko) (50756971)	名古屋学院大学・経済学部・講師 (33912)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	巽 智子 (Tatsumi Tomoko) (60837988)	神戸大学・国際文化学研究所・講師 (14501)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 国際シンポジウム「言えそうなのに言わないのはなぜかー学習者と母語話者の違いー」	開催年 2022年～2022年
---	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
その他の国・地域	National Taiwan University		